

奈良宣言

第44回全国町並みゼミは、コロナ感染者数の減少で観光客が戻りつつある、秋たけなわの古都・奈良で開催された。オンラインを併用するハイブリッド方式で、約400名が参加、「まちの資産のいかしかた：なにを、だれが、どのように」をテーマに、2021年11月12～13日の二日間にわたって開催された。

東大寺、興福寺など古社寺の町として知られる奈良だが、近年は、歴史的な町並みの残る奈良町を多くの人々が訪れるようになった。奈良町は、元興寺境内跡とその周辺に発展した狭義のならまちに、きたまち、京終・紀寺、高畑を加えた、個性豊かな4つのエリアからなる。プレゼミとして10月3日に開催された「奈良町トーク」には、各エリアから十指に余る多様なまちづくり団体が集結した。

ゼミ一日目、参加者は「奈良町 見知ル」の特別イベントに誘われて町を巡った後、午後からの分科会に臨んだ。

第一分科会「歴史的な町並みの保全に向けた制度の在り方：その課題と展望」では、奈良、倉敷、京都の報告をもとに討議が行われた。論点のひとつは、重伝建地区の対象となりにくい広範囲の歴史的地区をいかにして保全していくかであり、奈良の充実した景観制度に注目が集まった。同時に、京都から、もみじの小路町家群再生プロジェクトの体験をもとに、必要なのは制度を活かし、超える「町の力」であるとして、「制度の在り方」が狭義の制度論にとどまるべきではないことが指摘された。この間、私たちが、新たな制度の在り方を探ろうと学んできたユネスコHUL (Historic Urban Landscape) 勧告も、狭義の制度論にとどまらない活動の必要性をうたっていることが、改めて指摘された。

第二分科会「町家の継承の考え方：暮らしの変化に合わせた取り組み」では、萩、八女、奈良の事例を通して、①世代交代が進む中、移住者を積極的に受け入れ、町家の新しい利活用を進める必要がある、②町家の価値を損なわないよう建築家や技術者の養成を進める必要がある、③それらを実現するためにも主体の構築や資金の確保が必要である、という三つの課題に同時に応えていく体制が必要であることを確認した。

第三分科会「生活文化を継承する手法と課題：「なにを」残すのか」では、町家や会所に残る歴史や物語を掘り起こす奈良町、水と共生する生活空間が美しい滋賀県の針江・霜降、座敷文化を総合的に伝える新潟の古町花街などの事例から、モノ（建物や町並み）とコト（生活や歴史）の関係について話し合った。モノは残るが生活の消えた地域、その逆の地域、全く新しい環境など、さまざまな場につつまれ育つ子供達に、それらを伝える方法や文化景観にも議論は広がった。

第四分科会「まちづくり活動の経済的持続性：「どのように」ビジネスを取り込むのか」では、白杵、豊岡、奈良などで古民家ホテルや城泊などに取り組む4人のパネリストが、再投資によって経済の循環を実現していく必要性と可能性に言及しつつも、行政支援や地

銀等地元金融機関との連携が共通の課題として浮上した。

第五分科会「町の良さの伝え方：ニューヒーローの思い」は、各地の 40 代前後がコーディネーターとパネリストをつとめた。町の良さを伝えるために、SNS などの新しいメディアを駆使する必要性とともに、町並みのオーセンティシティや地域コミュニティの重要性があくまでも基本にあるべきことが確認された。

1 日目の夜は、峯山富美賞贈呈式と各地からの報告を行った。真壁、肥前浜宿、白杵、引田、小樽、新潟から、コロナ禍にあっても、次の目標に向かって粘り強く活動に取り組んでいることが報告された。2 日目は、奈良市の主催によるシンポジウム・全体会が開催された。開会セレモニーに続くオープニングアクトでは、町家を主人公にした朗読劇「町家よ語れ」が上演された。町家が自ら語るという手法を通して、人の営みが家と共にあるということを奈良町の歴史的な出来事を交えて披露し、町家の大切さを訴えた。

続く奈良まちづくりシンポジウムでは、奈良でまちづくり活動に取り組む倉橋みどりさんが、西村幸夫國學院大學教授、増井正哉奈良女子大学・京都大学名誉教授に、住民・市民のまちの資源をいかす取り組みのあり方を問いかけた。これに対し両教授は、奈良の運動への共感を示すとともに、全国の事例をひきつつ貴重な助言を行なった。

本ゼミは「まちの資産のいかしかた：なにを、だれが、どのように」を掲げ、第 1 回ゼミの「町並みはみんなのもの」、第 40 回ゼミの「町並みは私が守る」と展開してきたテーマを一步進め、町並み保存の主体と方法をいっそう具体的に明らかにしようとした。明らかになったのは、私たち自身の「町の力」を一段と高める必要性である。私たちは、学習・教育・実践を通じて、コミュニティの力量を確実に高めていくことを決意し、右宣言する。

2021 年 11 月 13 日

第 44 回全国町並みゼミ奈良大会参加者一同